

社会学的観点からみるオルタナティブな観光

——FIDR モデルによる CBT の機能と効果、意義について——

九州大学大学院 鈴木瞳

1. 目的

異なる他者と他者とが出会う場に観光がある。従来多くの失敗をもたらした観光を乗り越えるべく、オルタナティブな観光の構築が要求されている。その1つとして、コミュニティ・ベースド・ツーリズム（以下、CBT）という観光開発手法が実践されている。CBTは、地域の主体性に重点を置き、経済成長一辺倒ではなく、それぞれの地域に沿った発展を目指すものである。一方、多くの先行研究において CBT における「観光の失敗」が指摘されている。即ち、開発する人（内）／される人（外）という二項対立的な性格を抱える開発において、地域の主体性をいかに確保するのかというジレンマが克服されたわけではないのである。本報告では、未だはっきりと描かれていないオルタナティブな観光について社会学的観点から再考し、観光の機能や効果、加えてその意義について明らかにする。

2. 方法

上記の目的を達成するため、ベトナムの少数民族であるカトウ族の居住地域で行われた CBT の事例を取り上げ、現地調査を行った。当地域では、日本の NGO である FIDR（公益財団法人国際開発救援財団）が開発支援に携わっている。アクターアプローチ（Long 2001、小國 2003）に則り、カトウ族コミュニティや FIDR、訪れる観光客など、様々なアクター間で生じた価値の齟齬の場面の注目し、開発プロセスの中で生じた相互作用に焦点を当て、分析を行った。

3. 結果

当事例においては、観光が経済手段として機能するだけでなく、それまで無秩序に訪れていた観光客の行動を秩序化させることで、地域を守る仕組みとして機能していることを明らかにした。また、CBTは、カトウ族にとって試行錯誤の経験を積む場となっており、カトウ族自らで地域を支えていく力を培っていた。ここで、CBTの成否に欠かせなかったのが、FIDRによる関係機関との信頼に基づくネットワークの構築であった。FIDRはカトウ族コミュニティとの関係性を含め、行政機関や旅行会社、さらには観光客まで巻き込んだネットワークを形成しており、これらが CBT の運営に影響を与えていた。また、CBTの成否には、開発支援者である FIDR の志向性が大きな影響を与えていた。FIDRのスタッフたちは、「対話的合理性」（Habermas 1981）の実践ともいえる独自の手法を開発の軸として採用しており、価値の齟齬が生じる場面においては、「who am I」という問いかけによって自己を相対化させることで、地域の人々の主体性を担保した開発を可能にするとともに、CBTを成功に導いていた。

4. 結論

以上から、FIDR 式 CBT 開発においては、それに関与する様々なアクターたちが自律した個人として CBT に参加することで、外部性や異質性を取り込んだり、取り込まれたりしながら、意識的・無意識的に変化を起こしていることが分かった。CBT といったオルタナティブな観光の本質的意義は、その過程における相互学習行為にあるのではないかと考えられる。

文献

Long, Norman, 2001, *Development Sociology: Actor Perspectives*, London: Routledge.

小國和子, 2003, 『村落開発支援は誰のためか: インドネシアの参加型開発協力に見る理論と実践』明石書店.

Habermas, J., 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bd1-2. Suhrkamp., (= 1985, 86, 87, 河上倫逸他訳『コミュニケーション的行為の理論（上・中・下）』未来社）.